法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-05-27

琉球・沖縄文化の形成と外的衝撃-古代～中世並行期を中心に

YOSHINARI, Naoki / 吉成, 直樹

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
6
(発行年 / Year)
2013-05

Hosei University Repository

様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５　月　３０　日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2009～2012
課題番号：２１３２０１６０

研究課題名（和文）　琉球・沖縄文化の形成と外的衝撃
－古代～中世並行期を中心に

研究課題名（英文）　External Impacts on Cultural Formation in Ryukyu and Okinawa: Focusing on the Age of Ancient-Medieval Mixture

研究代表者
吉成　直樹　（YOSHINARI NAOKI）
法政大学・沖縄文化研究所・教授
研究者番号：80158485

研究成果の概要（和文）：
近年の奄美考古学の進展にともない、従来の琉球弧の歴史像を見直す必要があるとの考えから、グスク時代開始期（11 世紀～）から琉球国形成にいたる過程について再検討した。その結果、沖縄島の社会変革の画期はグスク時代開始期と 14 世紀半ばの城塞型の大型グスク形成期のふたつあり、それらの画期には沖縄島の内的な発展よりも移住を含む外的衝撃が大きな役割を果たしていた。また、琉球語はグスク時代開始期に形成されたとの結論を得た。

研究成果の概要（英文）：
This study re-examined the process of the Ryukyu government formation beginning with the Gusuku times in the eighteenth-century from the standpoint that it is necessary to revision the historical circumstances of the Ryukyu Islands in accordance with the recent advancement in archaeology of the Amami area. It was clarified that external impacts including immigration played a more important role than internal development on the Okinawa Island in social and cultural formation in this period.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,800,000	540,000	2,340,000
２０１０年度	1,500,000	450,000	1,950,000
２０１１年度	1,600,000	480,000	2,080,000
２０１２年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
総　計	6,200,000	1,860,000	8,060,000

研究分野：地理学
科研費の分科・細目：人文地理学
キーワード：文化地理学

１．研究開始当初の背景

２０００年代に入ってからの奄美考古学の進展はきわめて著しく、琉球弧全域の歴史像の見直しが必要になっていた。特に、沖縄諸島以南のグスク時代（１１世紀半ば～）の開始に、奄美の北三島（奄美大島、喜界島、徳之島）の果たした役割が、きわめて大きかったことが容易に想定される状況にあった。従来の研究史の見直しは、歴史学にとどまるものではなく、言語学、文学、民俗学、地理学における従来の認識も一新させる可能性があった。

２．研究の目的

Hosei University Repository

奄美考古学の劇的な進展の象徴とも言える喜界島の城久（ぐすく）遺跡群に焦点を当て、沖縄諸島以南の歴史過程にどのような影響を与えたのかを明らかにすること、もし喜界島がグスク時代の開始に大きな影響を及ぼしたとするならば、それは考古学、歴史学のみならず、言語学、文学、民俗学、地理学の諸分野の従来の考えまで見直す必要があると考えられ、その点の検討を行うことを目的とした。また、沖縄島における琉球国形成にいたる過程の社会変革の画期と、その原因について明らかにすることも目的とした。

３．研究の方法

奄美考古学の成果を踏まえ、沖縄島では奄美群島からどのような影響を受けたかについて、グスク時代開始期～琉球国形成期までの過程を考古学的に追うことを第一の課題とした。考古学の成果では、沖縄島のグスク時代の開始には、喜界島を中心とする日本の本土地域人びとの移住を想定していることから、この時代に琉球語が形成された可能性がある。したがって、その点を言語学、日本語学の立場から検証した。その方法として、首里王府によって１６～１７世紀に編纂された祭式歌謡集『おもろさうし』全語彙の年代の確定をするとともに漢語の使用法を検討すること、現在の琉球語に残る特徴を分析し、琉球語の成立期に、日本語のほかに影響を与えた言語としてどのような言語が想定できるかについて検討した。また、喜界島が文化の起点になって南下したとすれば、琉球国祭祀であるノロ祭祀の原型が喜界島においてすでに認められるか、また「琉球型」と呼ばれる聖地を中心に構成される集落空間も、喜界島で形成されたのではないかとの視点から調査を行った。

４．研究成果

（１）１１世紀半ば頃に始まるグスク時代の開始において、喜界島の城久遺跡群（９～１４世紀）が沖縄諸島以南に与えた衝撃はきわめて大きかったと考えられる。それは以下の二点においてである。第一に、グスク時代開始期に沖縄諸島以南に広域土器文化圏が形成されるが、その土器文化の構成要素である中国白磁、長崎県西彼杵半島産の滑石製石鍋、徳之島産のカムィ焼は喜界島に集中的に出土しており、従来の土器文化を一新させた土器文化の起源は喜界島であると考えられること、第二に、グスク時代開始期に北部琉球（奄美・沖縄地域）と南部琉球（宮古・八重山地域）を包括する交易ネットワークがはじめて形成されるが、その起点となったのは、１１世紀半ば以降、東シナ海をめぐる地域（中国、韓半島、日本）の交易拠点となっていた喜界島であったと考えられることである。したがって、グスク時代開始期まで採集狩猟社会であった沖縄諸島社会内部の論理（内的な発展）でグスク時代が始まったとは考えられず、喜界島を中心とする奄美群島からの影響を強く受けた結果である。カムィ焼が琉球弧全域に流通する理由について、従来、ヤコウガイをはじめとする南方物産の交換財との見方があったが、そうではなく喜界島の交易拠点から南下した人びとが使用したものとした。沖縄諸島以南の社会に奄美社会の影響が強く及んだのは、弥生時代並行期以降の琉球弧で盛んになる貝交易では、交易のベクトルはつねに北（本土地域、韓半島）を向いており、奄美地域の方がより先進的な本土地域の影響を受けやすかったこと、前代のイモガイ、ゴホウラなど貝輪の原材料になる交易を引き継ぐように、古墳時代並行期に開始されたヤコウガイ交易の中心は奄美大島にあり、沖縄諸島地域では古墳時代並行期の終わりにはほぼ終焉を迎えていたことと関連している。奄美社会の貝交易の優位性が、その後の歴史的展開を方向づけた。

（２）グスク時代のもうひとつの社会変革の画期は１４世紀半ばにある。この時期に、城塞型の大型グスクが構造化される。構造化されるとは基壇建物が造られ、巨大な城壁が建造されることを指す。この時期のグスクは前代のグスクから徐々に大型化していくのではなく、不連続的な変化の結果である。この変化もまた内部の論理で説明することはできない。１４世紀半ばは、中国では元明の交替期であり、東シナ海では倭寇が活動を活発化させていた時期である。明は１３７２年に琉球に朝貢するように詔諭するが、それは琉球を倭寇の「受け皿」として利用し、朝貢体制の中に組み込むことによって倭寇活動を抑え込む意図にもとづくものであった。１４世紀半ばの城塞型大型グスクの形成は、ちょうどこの時期に当たっており、明の倭寇対策の一連の動きの中で理解することができる。

（３）グスク時代の社会変革のふたつの画期の問題は、従来の研究史に関して以下の見直しを求める。１３世紀後半に浦添グスクを中心とする「初期中山王国」が成立していたとする議論は、１３世紀後半段階で沖縄島の各地に大型グスクが造営されていたとは考えられないことから立論は困難であり、したがって「初期中山王国」から三山が分立したとする想定にも根拠はない。また、英祖王の時代に「初期中山王国」が形成されたとする根拠になっている「浦添ようどれ（王陵）」に使用された高麗系瓦の「癸酉年高麗瓦匠造」の「癸酉」の年代として従来の１２７３年説にかわって１３３３年説が有力になってい

Hosei University Repository

ることも、上記の見方を裏づける。「三山時代」が明確に姿を表すのは１４世紀半ば以降である。また、従来のグスク時代研究が、なぜ内的発展論での説明に終始してきたか、研究史の整理を行い、その理由を探ることが、今後の重要な課題になる。ひとつの探るための手がかりとなる論考がある。太平洋戦争末期の沖縄での地上戦とそれに伴う大きな犠牲、米軍統治、１９７２年の沖縄の「日本復帰」以後も依然として続く基地問題などの経験を通して、沖縄の人びとは復帰した「日本」とは何か、「沖縄人」とは何かを痛切に問うことになった。その過程で、「日本」との差異が強調され、それとは表裏の関係にある沖縄の独自性、独立性が強調されることになった。その結果、かつて「独立国」として存在していた琉球国に対する憧憬を含む関心が喚起されたとする議論である（池田榮史「琉球国以前」2012）。こうした見方に立てば、琉球国形成にいたる過程も、心情的に「内的発展論」で説明しようとする志向が生じるのも不思議ではないことになる。

（４）喜界島の城久遺跡群が衰退に向かうのは１３世紀であり、１４世紀には終焉を迎える。一方、沖縄島では、１３世紀後半に今帰仁などで福建省産の粗製白磁が出現するようになる。この粗製白磁は、奄美群島などからは出土しておらず、沖縄島で独自の交易が開始されたことを示す。奄美群島では１３世紀後半になると北条氏の得宗領となり（１３０６年の「千竈時家処分状」では長男に奄美大島と喜界島を譲るとある）、交易の自由が大きく制約され、それが城久遺跡群の衰退に結びついたと考えられる。沖縄島で１３世紀後半から独自に中国との交易を開始するようになるのは、こうした喜界島の交易者が南下した結果である想定できる。「今帰仁」の古地名は、１５世紀の朝鮮の『海東諸国紀』には「伊麻奇時利」と記されており、これは「今来＋知り」と解されている。文字通りに解釈すれば「渡来系の人びとが統治すること」を意味する（「知る」は「統治する」の意味）。

（５）沖縄島に喜界島を中心とする地域から交易者が流入することによってグスク時代が始まったとすれば、琉球語の形成も、その時期であったと考えることができる。実際に、グスク時代以前と以後では、人骨に大きな変化がみられ、本土中世人に似てくるとする議論があることも、本土地域からの人びとの移住を裏づける。グスク時代開始期までの沖縄諸島以南は採集狩猟社会であり、日本語の語彙、文法などを体系的に受容する社会的基盤はなかったと考えられる。８世紀段階の隼人に通訳官の官制（『続日本紀』など）が存在していることから、この時期の南九州も日本語ではなかった可能性があり、上記の想定の根拠になる。琉球弧で日本語の使用の嚆矢になったのは「在地性がほとんどない」、本土地域からの移住者が中心を占めていた城久遺跡群（９～１４世紀）であったと考えられる。グスク時代以前の使用言語は、南部琉球（宮古・八重山地域）は、その文化的系譜から考えてオーストロネシア語族（南島語族）であったことは間違いなく、また北部琉球（沖縄・奄美地域）においてもオーストロネシア語族的な要素を持つ言語であったと考えられる。それは現在の琉球語の若干の語彙、文法的特徴、地名（場所を表す接頭辞 i-の付く地名、語尾-an の地名）に残存している。とくに、地名に見られ（アマミ）、琉球神話で重要な意味を持っている「アマミキヨ（「キヨ」は「人」の意）」の語はオーストロネシア語族で「ヤドカリ」を意味する「アマン」に由来するのではないかと推定した。琉球弧においては「ヤドカリ」は、女性の手の針突（刺青）の文様になることがあったが、それは人間の祖先は「ヤドカリ」だったと信じられていたからである。

（６）（５）の前提のもとに、祭式歌謡集『おもろさうし』の全語彙の年代を検討したところ、11 世紀～１２世紀を遡る語彙はないことが明らかになった。従来、「おもろ」の中にはグスク時代以前の「おもろ」の存在を想定する考えもあったが、否定されることになる。また、１１世紀半ば頃のグスク時代開始期に琉球語が形成されたとする考えを裏づける結果になった。『おもろさうし』の漢語の使用法を検討した結果、本土中世の影響を強く受けていることが明らかになり、「おもろ」の成立年代を明らかにする手がかりを得ることができた。『おもろさうし』と琉球語の成立は別に考える必要があるが、『おもろさうし』から琉球語の形成を古く遡らせる根拠を見出すことはできない。『おもろさうし』には上代東国方言（「かなしけ（愛）」「しるへ（後方）」「わぬ（我）」など）とされる語彙が若干認められるが、この東国方言の語彙の存在をどのように説明することができるかは今後の課題である。

（７）琉球語の語彙の中に古代朝鮮語～中期朝鮮語の要素を見出す作業を行った。それは、次のような経緯を想定するからである。第一に、グスク時代の開始期に徳之島で高麗無釉陶器の技術的系譜を引くカムィ焼が生産、流通するが、その生産には高麗から陶工が渡来したと考えられること、第二に、カムィ焼は高麗陶器を使用していた人びとが、その代替品として使用した可能性があり、出土量が突出して多いのは徳之島と喜界島であること

Hosei University Repository

から、喜界島には高麗商人をはじめとする高麗人が存在したと考えられること、第三に、沖縄島のグスク時代の開始にあたっては喜界島と、その交易拠点にかかわる人びとが沖縄島以南の島々に南下したと考えられ、当然、そこには高麗人も含まれていたと考えられること、第四に、高麗とのかかわりは十四世紀頃の高麗系瓦の出土にみられるように、その技術者集団の南下が断続的に続いたと考えられることである。こうした視点からの検討の結果、地名、政治、宗教等にかかわる一定数の語彙を抽出することができた。ただし、体系的に見出したとは言えない状況であり、これらの語彙が、どのような過程を経て使用されることになったのかを説明することが課題として残された。また、１４世紀後半の明への朝貢記事から名前の出る「察度」は、固有名詞ではなく、地位名を表す普通名詞とする議論は以前からあった。この名称は、韓半島において高麗から李氏朝鮮に王朝が交替した直後から、『朝鮮王朝実録』の中でしばしば名前が登場するようになる。１３９４年、中山王・察度が朝鮮に亡命している南山王子・承察度の送還を求める、１３９８年、山南王・温沙道が朝鮮に寓居しており、同年に没したとする記事である。いずれも１３９２年の王朝交代直後の記事であり、しかも「察度」「承察度」「温沙道」の「察度」「沙道」の読みはいずれも「サト」である。この「サト」は高麗時代の有力な地方官の役職名の「使道（サト）」と音は同じである。１４世紀頃の前期倭寇の中には、高麗時代の混乱の中で、中央の統制から離れて独自に活動するようになった地方勢力も含まれており、そうした人びとが１４世紀中ば頃の城塞型大型グスクが造営される時期に沖縄島に渡来した可能性も十分に考えられる。首里城や浦添グスクなどに高麗系瓦が使用されている理由も、この点に関連づけて検討する必要がある。この点は、仮説の域を出るものではないが、「サト」と呼ぶ地位名称を持った人物が、高麗系瓦を使用したグスクを建造したとする想定を掲げておきたい。

（８）琉球国の祭祀（ノロ祭祀）の「原型」と言えるものが喜界島の城久遺跡群の時代に成立していたのではないかとの視点から検討した。この点について決定的と言える資料は見出しがたかったが、１２世紀頃の成人女性の副葬品として、頭蓋骨の脇に４９個の鉛ガラス玉が埋葬されている事例があった。これはシャーマンの存在を想定させる。琉球国時代のノロ祭祀が女性によって行われていたこと、ノロはガラス玉の首輪を着用していたことを考えれば、琉球国以前の祭祀を考える際の手がかりになる。鉛ガラス玉の産地が同定されれば、交易ルートの復元のみならず、喜界島のシャーマンの出自も明らかになる可能性がある。時代は下るが琉球国以前の事例として、奄美大島の朝仁貝塚でも、成人女性の副葬品として３７個の鉛ガラス玉が出土している。ガラス玉に関連して言えば、奄美地方から沖縄島の北部地域の神女によって使用された多数のガラス玉で編んだ玉ハベルと呼ばれる装束（神女の背中に垂らす玉の織物）が用いられる。副葬品として馬具などが出土する藤ノ木古墳（６世紀後半）出土の装束ときわめてよく似ていることも、今後、検討すべき課題である。

（９）喜界島の集落の空間構成、民家形式について検討を行った。ここでも、喜界島が沖縄諸島以南の文化に影響を与えているならば、喜界島が起源になっていると考えられるからである。喜界島の集落空間の特徴は、民家や聖地（神聖領域）を囲うように、また接するように道を湾曲させていることが多い。これは沖縄諸島以南の風水思想の影響を受け、守るべき神や住民にかかわる道を湾曲させたためと考えられる。集落空間は琉球王国時代の影響、ことに腰当（くさて）思想の影響を強くうけていることが明らかになった。また、民家形式は、南九州住文化圏、奄美住文化圏、琉球住文化圏が、（表－裏）（上－下）という直交軸空間概念であるのに対し、喜界島は主棟を起点として、「　型空間軸の概念関係がみられる。また、主棟にも└　型二面縁側がみられるが、こうした形式は南九州住文化圏と琉球住文化圏が重層した喜界島独特の空間秩序を形成している。現象面をみれば、喜界島の住文化は、基本的に南九州と琉球の住文化の重合の結果とみることができるが、喜界島の琉球的な要素の歴史的深度は不明である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①間宮厚司　言語資料としての『おもろさうし』　日本語の研究　日本語学会　査読有　７－４、２０１１、１３５－１４９

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計２件）

①吉成直樹　琉球の成立－交易と移住の歴史　南方新社、２０１１、２８６

②高梨修・阿部美菜子・中本謙・吉成直樹　沖

Hosei University Repository

縄文化はどこから来たかーグスク時代という画期　森話社　２００９、３０８

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

①研究成果報告書

吉成直樹編『琉球・沖縄文化の形成と外的衝撃－古代～中世並行期を中心に－』森話社、２０１３、１７１
（執筆者：吉成直樹、池田榮史、髙梨修、永瀬克己、間宮厚司、阿部美菜子、橋尾直和）

６．研究組織
(1)研究代表者
吉成　直樹（YOSHINARI　NAOKI）
法政大学・沖縄文化研究所・教授
研究者番号：８０１５８４８５

(2)研究分担者
永瀬　克己（NAGASE　KATSUMI）
法政大学・デザイン工学部・教授
研究者番号：３００６１２３７

(3)研究分担者
間宮　厚司（MAMIYA　ATSUSHI）
法政大学・文学部・教授
研究者番号：３０１９９９１３

(4)研究分担者
中本　謙（NAKAMOTO　KEN）
琉球大学・教育学部・准教授
研究者番号：１０３８１１９６

Hosei University Repository